

非正規雇用に就くことは労働者にとってどのような意味をもつのでしょうか。非正規とはいえ働き口があることは、短期的には労働者にとって望ましいといえます。ただ、正規雇用への移行が難しい場合、非正規雇用に就くのは注意が必要といえるでしょう。

## やさしい経済学

### 雇用を考える

#### 増える非正規雇用

③

だし、男女で違いが大きく、男性は移行確率が20%超なのに対し、女性は5%程度となっています。より長期の移行確率を厚生労働省の「21世紀成年者縦断調査」で見ると、2002年に非正規雇用に就いていた労働者が8年後に正規労働に移行した確率は男性で38・5%、女性で15・0%となっています。

慶応義塾大学准教授 山本 勲

このように、短期と長期のいずれでも正規雇用への移行確率は40%を下回っています。こうした移行確率は国際的にみても低い水準にあることや、学卒時に非正規雇用に就くと、その後も非正規雇用状態が続きやすいことを示す研究もあります。

つまり、非正規雇用には、いったん就くと長期化する傾向

### 希望すれば正規登用を

向があるといえます。非正規雇用は教育訓練を受ける機会が少ないため、非正規雇用の長期化によって、仕事で必要な技能蓄積の遅れや労働生産性の低下をもたらしかねません。また、健康状態を比べると本意に非正規雇用に就いている人ほど、ストレスなどの心身症状が多いことを示す研究もあります。

うな制度が必要といえます。もっとも、企業によっては、非正規雇用者を正規雇用に登用する動きがあるのも事実です。慶応義塾大学の松浦寿幸専任講師と筆者が行った研究によると、正規雇用への登用制度を導入すると、製造業や中小企業などでは、生産性が中長期的に高まることがわかっています。労働者の移動が活発でない日本の特性を踏まえると、企業での正規雇用への登用制度が注目されます。